慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	神谷不二先生を偲んで
Sub Title	
Author	呉, 忠根
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.10 (2009. 10) ,p.132- 133
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	神谷不二先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20091028-0132

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

神谷不二先生を偲んで

私が神谷先生の研究室のドアを叩くようになったきっかけは、先生の『朝鮮戦争』（中公新書）を読んだことであった。今では信じ難いことだが、私が韓国から来た一九六〇年代初めの日本社会には、朝鮮戦争は米韓の「北侵」で始まったとする見方が一部に依然根強かった。古書店では、米韓挑発説を巧みに組み立てた、I・F・ストーンの『秘史・朝鮮戦争』（新評論社版）が、「これを読んで目が覚めないものを白痴というのであろう」という清水幾太郎の評を帯にして売られていた。西側の一員として繁栄している日本でのこのような状況は、この戦争を体験した私には不思議でたまらず、奇怪にさえ思えた。そんなときに出会ったのが、誤った朝鮮戦争観を正した前記の『朝鮮戦争』であり、先生のお名前は尊敬の念とともに記憶に強く残った。そのため、後に私が遅まきながら研究者の道を選んだ際は、半ば当然のように、神谷先生のご指導を受けることを目指し、七六年に大学院（法研・博士）に入学してそれが実現したのである。

大学院では、先生に直接あるいは見よう見まねで、実証性や正確性など研究の基本を教わった。また、先生は社会的マナーに厳格だったので、私はこの面でも多くのことを学んだ。話は変わるが、神谷先生を語るとき真っ先に頭に浮かぶのは、就職の問題で大変ご心配をおかけしたことである。私はこの問題への先生のお心遣いに、涙が出るほど感動したことがある。私は八四年に学位を取得したものの、就職は五里霧中の状態であった。年齢が五〇歳目前の上に外国籍ということもあって、教職の狭き門はまさに駱駝にとっての「針の穴」に等しかった。そのようなある日、突然先生から電話がかかって、S大で教員公募があるらしいから至急履歴書を持って研究室に来るように言われた。そこで、指示された通りに三田の研究室に駆けつけると、ちょうど先生も私の推薦書を書き上げたところだった。先生は、封をする前にその内容を読み聞かせてくださったが、そこには一般的な推薦辞に続いて次のような下りがあった。「なお、人物については私の人格を賭けて保証します」。もちろんこれは、この無策の門弟になんとか働き口を見つけてやりたいという、先生の熱い思いから出たお言葉であったが、私は

今でもこのことを思うと胸に迫るものがある。ちなみに、このときの応募は実を結ばなかったが、私が二〇〇五年に定年退職するまで勤めた帝京大学の場合も、先生のお目配りで非常勤に就いたのが始まりであった。私にとって神谷先生は師であると同時に、意識の上では後見者のような存在でもあった。

神谷先生がお亡くなりになるまで、私はほぼ月に一回、先生が座長を務める研究会でお目にかかっていた。今年の最初の研究会は一月十九日だったが、先生はいつものようにお元気で会を主宰された。その後、近くのレストランで開かれた「新年会」でも、私が「最近食欲はいかがですか」と伺ったら、「何でもよく食べます」とのお返事だった。研究会の後はいつも先生と近くの地下鉄の駅まで歩き、そこでお別れしていたが、この日も、歩調がややスローペースになられた先生にお伴して地下鉄の駅まで行き、改札口でお見送りしたが、これが先生との最後のお別れになってしまった。二月二三日は先生のお通夜が営まれたが、本来ならこの日は二月の研究会が開かれて、私は隣で先生のお話に耳を傾けていたはずだった。

神谷先生、ありがとうございました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

元帝京大学教授
群馬県立女子大学非常勤講師　呉　忠根